

2021年11月14日～11月20日 各家庭でのディポーション用テキスト

■任務遂行の訓練（4/4）

パウロがこのような環境の下で体験した神の恵みを、あなたも体験することができる。パウロはたましいの奥底に語られる神のみことばを聞いた。「恐れてはいけません。パウロ。あなたは必ずカイザルの前に立ちます」（27：24）。これは荒れ狂うガリラヤ湖上で恐れおののく弟子たちが経験したものと似ている。彼らは、「しっかりしなさい。わたした。恐れることはない」と言われる主の御声を聞いた（マルコ6：50）。この二つの出来事において主がなさったみわざの順序は同じである。まず初めに、ご自分の子らの生活の中からあらしを追い出し、それから彼らを外のあらしから救い出される。あなたの人生の海に風がうなり、波が荒れ狂っても、神があなたに、「恐れるな。あなたは神のみこころを成就しなければならない」と言われる御霊の静かな細い御声を聞き分けさせてくださるように。「こうして、彼らはみな、無事に陸に上がった」（使徒27：44）。

敵対者の邪悪さ　　神のしもべパウロは、これくらいで、任務遂行の途上において困難を十分に耐えたのではないだろうか。だが敵はそう考えなかった。パウロは人々の怒りを恐れ、年月の空費も失望の波も無事に通過した。それゆえ、直接攻撃によらなければならない。「柴をたばねて火にくべると、熱気のために、一匹のまむしがはい出して来て、彼の手に取りついた」（使徒28：3）。まむしの毒から逃れる方法はなかった。ただ死があるばかりである。「へび」はどのようにして神の子らを襲うだろうか。時には、ある女を十八年間も縛っておいた場合のように、病気によって襲うかもしれない（ルカ13：16）。そのほか、自己憐憫という形で襲い

(マタイ 16 : 21-25)、あるいは自己満足に陥れて「悪魔と同じさばき」を受けるようにしむける (Ⅰテモテ 3 : 6)。「デマスは今の世を愛し、私を捨てて……」(Ⅱテモテ 4 : 10)。

敵は突然、そしてすみやかに私たちを打ち、私たちを神に奉仕するのに無能とし、私たちに対する神のみこころに不名誉窮まりない終局を与えようとする。

敵が私たちを打つとき、私たちは主にあって強くあり、御霊に満たされ、尊い血潮の下に立ち、神に従い、人に奉仕し、私たちもまた彼を火の中に振り落として何の害もこうむらない者とならなければならない (使徒 28 : 5)。パウロにとってそうであったように私たちにとっても、このような経験は、主の救いの力と守りの力を他の人々にあかしすることになり、私たち自身も、主の救いのゆえにより強くなるであろう。神のみこころが成就する日は必ずやって来る。そのとき私たちは「ローマにはいる」のである (16 節)。

私たちは、「わたし自身がいっしょに行って、あなたを休ませよう」(出エジプト 33 : 14) というモーセが経験した確信を自分のものにし、「強くあれ。雄々しくあれ。恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、主が、あなたの行く所どこにでも、あなたとともにあるからである」(ヨシュア 1 : 9) というヨシュアの経験した力を受け、「主は私を、すべての悪のわざから助け出し、天の御国に救い入れてくださいます。主に、御栄えがとこしえにありますように」(Ⅱテモテ 4 : 18) というパウロの経験した恵みにあずかろうではないか。

任務遂行の訓練は安易ではなく、軽くもない。それを遂行するには苦痛と危険が伴う。しかし、その頂は喜びである。